

Middlemarch

1. Dorothea の, Mr. Casaubon との結婚における 誤ちについて

嶋 田 貴美子

(序)

小説のタイトルになっている *Middlemarch* というのは、George Eliot (1819—80) が生後数ヵ月の時から21歳までを過した Gliff House のあった地方都市 Coventry をモデルにしているといわれる、George Eliot による虚構の街の名前である。その都市名がそっくりタイトルに使われていることからもおおよそ推察されるように、*Middlemarch* の小説は1832年、イギリスの民衆をいやがうえにも政治的熱狂のうず巻き込んだ第一次選挙法改正案がイギリス議会を通過したその直前の頃の、*Middlemarch* の街に生きる市民たちそれぞれが描く人間模様を網羅した壮大な story である。そのため *Adam Bede* や *Felix Holt, the Radical* では構成ミスとして多くの批評家から指摘された、主人公に特に偏重しない、他の登場人物それぞれの劇的人生をも含めたものすべての微妙な統一体として構成されている、以前の小説のオムニバスの作風は、この *Middlemarch* においては見事に成功しているのが確認される。

市民たちは職種や社会的階級や身分に大きな相違を持ちながらも、お互いに古い時代の地方共同体に特有の、強い有機的関係を持ち、そういう関係が因習となって人心をいやがうえにも束縛する都市という社会の中で、それぞれがかかえている生きる上での問題を社会と苦闘しながら解決していくのである。

実に雑多な人々の織りなす煩雑な story を、分散させることなく引きしめるよう常に配慮がなされているのが、高い身分出身で、美しく聡明な18歳の少女である Dorothea Brooke (Miss Brooke) の、50歳にもならんとする風変わりな牧師兼学者である Mr. Casaubon とのむこうみずな結婚であり、Casaubon 亡きあとの Casaubon の second cousin に当たる Will Ladislaw との恋愛と結婚の story である。Miss Brooke の次に *Middlemarch* の中で大きなウエイトを持って描かれるのが、新進気鋭の青年医師 Lydgate であるが、彼の医学に対する燃えるような理想が、*Middlemarch* の市長の娘で *Middlemarch* きての美人との評判は高いが、Lydgate の学究生活を理解しようとはしない少し軽薄なところのある Rosamond との結婚によって、次第にくじかれていく story も Miss Brooke の story に負けない迫力を小説全体に与えている。

これは、今、われわれが手にすることができるこの *Middlemarch* が、1869年の年頭から書き始められ未完のままになっていた上記のとおり青年医師 Lydgate を主人公にしているやはり *Middlemarch* と題された小説と、それからほぼ2年後新たに書かれた *Miss Brooke* という小説とを、*Miss Brooke* の方に基調を置きながら合体させたものであるからである。

彼らの他に *Middlemarch* に登場する重要な人物をあげれば、偽善的な銀行家で過去の罪ゆえに中年を過ぎた今、苦渋に満ちた生活を送ることが余儀なくされている Bulstrode. Middlemarch の市長兼工場主といういわば urban bourgeoisie である Vincy 氏とその家族、大金持で一人暮らしの老人 Featherstone, 誠実な土地差配人 Garth 氏とその家族, Reverend で、やさしく広い心の持主の Farebrother 氏とその家族, また Rector Cadwallader 夫妻等々である。この膨大な小説を統合的に論じることは私には至難の業と思われるので、この論文ではまず Dorothea Brooke (Miss Brooke) の結婚の問題だけに焦点をしばって考えていくことにする。

(1)

オムニバス形式で書かれた *Middlemarch* の小説の一応の主人公として常にそれなりの迫力を持ち、その長大な小説を読み切るまでの長い期間読者の関心をひきつけ続けなければならない Dorothea Brooke の役割は、何といてもこの小説の成功失敗にかかわる最も重大なものである。それだけに Dorothea にはスケールが大きくて非凡な character が要求されねばならない。そして彼女はまさにこの小説の、各々強烈な個性を主張している並いる登場人物の中において、20歳にも満たないうら若き女性ながら立派に heroine としてそういう重要な役割を務めあげている。彼女の中に秘められたそのスケールの大きな非凡な character とはどのようなものであったかは *Middlemarch* の小説そのものを読むことによって理解することができるけれども、900ページもの小説を読破すること以外に最も端的にそれを知る方法は、George Eliot が明らかにそれを意図して *Middlemarch* の冒頭に掲げた1ページ半ほどの Prelude の中でのべている、19世紀初期当代より300年前に波乱の人生を生きた Saint Theresa の人となりを知り、彼女に Dorothea を重ね合わせてみることである。

⁽¹⁾
その Prelude の中で George Eliot はそれとなく Dorothea を象徴している Saint Theresa の理想にもえる ardent character を次のように語っている。

Theresa's passionate, ideal nature demanded an epic life : what were many-volumed romances of chivalry and the social conquests of a brilliant girl to her? Her flame quickly burned up that light fuel; and fed from within soared after some illimitable satisfaction, some object which would never justify weariness, which would reconcile self-despair with the rapturous consciousness of life beyond self.

(Theresa の情熱的な理想を追い求めようとする生来の性格が何としても手に入れたかったのは叙事詩的な生涯であった。何冊にも及ぶ騎士道の物語や目もあやな少女が社交界を制する話など彼女にとっては何の意味があったであろうか。彼女の情熱の炎はそのような軽々しいものなどあっというまに燃え尽くしてしまった。それよりも内面から注がれたものに勢いをえて、ある果てしない満足、すなわち、倦んだ生活をよしとはせず、絶望と、自己を越えたところにある熱烈な生命の意識とが同化しうるものを求めて舞い上がったのだ。)

そして Spain の Saint Theresa は自らが希求していたその epic life を教団の秩序の改革に見出し、彼女の人生は美しい完結を見たのであったが、Dorothea にいたっては何らそ

れを見い出せないままに、彼女の燃えるような理想はたちまちにしてついで去るのである。彼女の理想をそのように短期間に挫いたものは一体何であったか、彼女の最初の結婚の意義、それから、人生における過去、現在、未来の一貫性を主張する George Eliot のその主張にのっとった Dorothea の一度目の結婚と二度目の結婚との関連について等これから考察していきたいと思う。

(2)

George Eliot が Dorothea を、結果的には歴史に何の痕跡も残さず消え去りはしたものの、それでもなお現代版 Saint Theresa としているものは、Dorothea の、理想に向かう情熱に燃えるような精神と、強いピューリタンの信仰にのっとった彼女独得の正義を生きようとするその生きる姿勢にあった。そして彼女の人生上の正義は二つのものから構成されていたのである。一つは上に記したような色濃いピューリタンの思想に根ざした、世の人のためになることを行うことである。その手始めとして彼女は18歳の現在、地主のあととり娘という地位にある立場上、一番身近な問題である tenant の悲惨な住環境の改善に積極的に取り組み出しており、新しい農村というその大構想が彼女の頭の中にすっかりでき上がり、すでに具体化されんとしていた。そのほか学校や病院などの公共施設に積極的に関与することもその正義に含まれていたのであった。しかし、作者の George Eliot がこのように偉大な翻訳家でもあり思想家でもありさらにまた小説家となり、結婚するまでは、当時のイギリスの思想界をリードしていた Westminster Review 誌の事実上の編集責任者として社会的に確固たる地位を持ったいわゆるキャリアウーマンであったのにもかかわらず、兼ねてから女性の人生における結婚の重要性を痛感していたのと同様に、Dorothea にもその一つ目の正義を生きる背後には当然のこととして、ある男性と結婚するという前提がありそしてその結婚にこそ彼女はさらなる Saint Theresa 的 epic life を求めていたのである。

それで彼女の人生のもう一つの正義は、次のような彼女の特異な結婚観にもとづいてとにかく偉大な人と結婚することであった。

The thing which seemed to her best, she wanted to justify by the completest knowledge ; and not to live in a pretended admission of rules which were never acted on. Into this soul-hunger as yet all her youthful passion was poured ; the union which attracted her was one that would deliver her from her girlish subjection to her own ignorance, and give her the freedom of voluntary submission to a guide who would take her along the grandest path.
(chap. 3)

(彼女にとって最善と思われることは、完全な自己の認識にもとづいてそれを正当化することであった。決して守られない規則をただうわべだけで認めているようなふりをして生きたくはなかった。今までのところ彼女の若い情熱のすべては、この魂の渴望に注がれてきたのである。彼女の気持を強く引きつける結婚という結びつきは、自分自身の無知にただ従うだけだった子供っぽい状態から彼女を解き放ち、最も広大な道に彼女を導き、共に歩んでくれる人に自分からつき従う自由を与えてくれる、そういう結びつきなのであった。)

すなわち「自分の人生を最大限に効果的なものにしたいという願望」をもっていた彼女の結婚観は、人生の目的 (the end of life) についての高尚な情熱で濃く彩られていて、彼女の住む Tipton 界隈の若い女性たちが結婚に対してあこがれる高雅な嫁入支度も食器の模様も、また今まさに花盛りの新妻の誇りや喜びすらそこには何の色合いも添えることはできなかったのである。人間の条件を duties and affection とし、"Marriage is a state of higher duties. I never thought of it as mere personal ease." と言い切る彼女は、彼女の意図する結婚が、人間としての善なる生の完成でなければならなかった。それで彼女はもし生まれる時期さえまに合ったなら、16世紀の偉大な牧師兼神学者であった Hooker と、さらにはまた盲目になった John Milton とさえきつと結婚するだろうし、「また他の偉大な人の誰でもいい、たとえその人に風変りな習慣があったとしてもそれに堪えることはきっと栄光に満ちた敬虔な行為となることだろう」と思う。

聡明であるがゆえに無知な自分を過大に意識し、その無知から脱却することばかりか、そのはるかかなたにあるはずだと確信している自分の知らない深遠なる世界を追い求め、そしてまた過去のピューリタンの教育の影響である強い禁欲的思想傾向が行きつく善なる世界に強く憧れる Dorothea の、上記のような結婚観に、現在彼女に思いを寄せている貴公子で、Freshitt Hall の広大な manor を領する俗なる世界の典型ともいうべき Sir James Chettam が合致する点が全くないのは明らかなことであった。Sir James の、自分自身の主義主張も独自の思考パターンも持たない人特有の、常に相手の話に迎合しようとするその話しぶりや、血色のよい思索的でないその顔色、「くぼみができるほどふくらんだ彼の手」は思い出すのも不愉快である Dorothea は、それで、James の Dorothea への恋情を察した周囲の人々の、自分と James との結婚のうわさに、まるで名誉でも汚されたかの如く激怒する。その一方で Dorothea は Brooke 家に招かれた Edward Casaubon という中年の Reverend 兼神学者にかつて経験したことのない衝撃的な印象を持ち、その印象は彼が独身であったことから自分の結婚の相手としての憧れへと変わっていく。

Casaubon 氏は Brooke 氏とは Reverend として Lowick に赴任してきた当時からすでもう10年来の交際があったが、Dorothea は12歳ほどで両親を失い、父方のおじで60年このかた独身を通してきた Mr. Brooke の家に妹の Celia と共に身を寄せるようになってまだ一年と満たなかったため、Casaubon に会ったのはそれが初めてのことであった。

Dorothea はまず Casaubon のとても威厳のある物腰と Locke の肖像によく似た鉄灰色の (iron-grey) 髪の毛、深く落ちくぼんだ眼窩、がっしりした体の Sir James とは全く対照的なやせた体つき、研究者に似つかわしい青白い顔などにぐいぐいと引きつけられていく。そしてさらに Casaubon への思いを決定的にしたのは、彼女がそれまでの人生の中で会った人の誰からもきいたことのない、Casaubon の特異な次のような生活実態を知ったことであった。

"I have little leisure for such literature just now. I have been using up my eyesight on old characters lately; . . . : I feed too much on the inward sources ; I live too much with the dead. My mind is something like the ghost of an ancient, wandering about the world

and trying mentally to construct it as it used to be, in spite of ruin and confusing changes.

……”

(chap. 2)

(「私は今現在そのような文学書を読む時間はほとんどないのです。私は最近では昔の文字を読むことに私の全視力を向けています。……私の生はあふれるほどの内的源流を糧にしているのです。すなわち私の生活はあまりにも多くの部分が死者と共にあるのです。私の心ははるか昔の世界をうろうろとさまよい歩き、うち壊されて思わすろたえてしまうほど変りはてているにもかかわらず、精神的な意味でもとあったままの姿になろうと努力している古代の亡霊のようなものです。……」)

もともと「強烈なものの偉大なものにたちまち心を奪われ、そのような特質を持っていると自分の心に映るものなら何でもすぐさま受け入れてしまうむこうみずな」ところのある Dorothea の目には、Casaubonこそ古今をとわなない一級の偉人の一員として映し出されていく。彼女は「…真理という最高の目的をめざして過去の世界を再建するなんて！ 何とすばらしい仕事なんだろう。明かり持ち (lamp-holder) でも何でもいい。とにかくそばにいて何か彼の仕事を助けてあげられたら！」と思う。そしてさらに Casaubon との二人だけの会話の中で Casaubon が展開してみせた彼の学問の構想の雄大さにすっかり心を奪われてしまったのである。Casaubon に対する Dorothea の想念は、最初の印象の Locke からさらにどんどん幅を広げ、⁽⁵⁾「Bossuet の生き返り (living Bossuet)」⁽⁶⁾ と思い、*Pensées* の中からその数節を暗唱しているほど尊敬しているその作者の Pascal⁽⁷⁾ とともに、はたまた「学者と聖者の両方の栄光を備えた現代の Augustine」⁽⁸⁾ であるとも思う。

1 人の人の評価は常に変ることのない絶対的なものというのではなく、その人を評価する側との相関関係によって決められるものである。Dorothea とは対照的にごくごく常識的な考え方をする妹の Celia にとっては、Dorothea にはこれほど偉大な聖人にみえた Casaubon も “How very ugly Mr. Casaubon is !” としか映らない。Casaubon の顔に Dorothea がはっきりと見る a great soul などとうていみることはできず、それより何より Casaubon の顔にある奇妙な白あざと、食事の時 Casaubon がたてるスプーンをスープのお皿に当てる音がどうしてもがまんできない Celia は、ひと時も Casaubon と同席することを嫌がっている。そしてまた Casaubon とは初対面であった Dorothea や Celia とは異なり、同じ Middlemarch の住人として古くから昵懇である人々も Casaubon に対してはいろいろの評価を与えている。

まず Dorothea への思いが断ち切られた腹いせもわずかに手伝ってはいるが、それよりも 50 歳にも手が届くほどの年齢の男の、18 歳の娘を妻に迎えようというようなとんでもない理不尽さへの義憤から、Sir James Chettam は Casaubon をおいぼれた a dried bookworm (ひからびた本の虫) とか、no better than a mummy (ミイラも同然の男) とかあるいはまた「正しいことをしたいと思っても羊皮紙に書いた法典のように人間的でない人物」と評し、一方 Freshitt の Rector の夫人である Mrs. Cadwallader は Casaubon を A Great bladder for dried peas to rattle in (かわいた豆がカラカラ鳴っている大きな豆のさや) という言葉で一口に表現する。そして “He has got no good red blood in his body.” と酷評す

(chap. 3)

る Sir James Chettam のその批評を受けてこの Cadwallader 夫人はさらに比喻を深めて、
“No. Somebody put a drop under a magnifying-glass, and it was all semicollons and parentheses” (「ほんとうにそうだわ。彼の血を一滴顕微鏡の下に置いたら、セミコロンの括弧だけしか見えなかったなんてことになりますわ」) と応酬している。一方 Casaubon にとっては Dorothea が来るまでは一番身近な存在であった Will Ladislaw は Casaubon を a Bat of erudition (梟学者) とかあるいはまた, this dried-up pedant (このひからびた銜学者) と内心嘲笑し、さらには「行商人の裏の物置に積まれたままになっている売れ残りのにせの古代遺物ほどの価値しかないささやかな解説をあくせく作り出している男」だと考えているのである。そのように Casaubon の、牧師としても学者としてもその真価を認めない Middlemarch の人々の一般的な視方の中で、Dorothea のおじである Mr. Brooke がただ一人「Casaubon は将来 bishop にもなろうかという」立派な牧師だとほめているのである。もっとも Mr. Brooke は自分の中にそれだけの強い個性がなく人を批判したり非難したりしない性格であるから彼の視方は信憑性に欠けるところがあるとみなさざるをえないかもしれない。それでこれらの人々の中でそれほど抽象的でもなく一面的でもなく Casaubon をもっとも公平な目で見ているのは、Cadwallader 牧師ということができるであろう。彼は Casaubon に対していろいろな視方がなされる中で次のように Casaubon の評価をしめくくっている。

「Middlemarch で演説をぶったある急進派の男が言っていましたね、Casaubon 氏は何の意味もない言葉をやたらと使いたがる学者牧師、Freke 氏はレンガとモルタル牧師、そして私は魚つり牧師だと。全くみんなどんぐりのせいくらべで甲乙つけがたいというところでしょうねえ」
(chap. 8)

すなわち Dorothea の、先に述べたような Casaubon を一級の偉人とする高い評価は、wise になりたい彼女の eager and ardent character が作り上げた幻想であったのであり、彼女の Casaubon との婚約そして結婚は、若い彼女のその幻想と理想との急速な崩壊の過程であったばかりか、Middlemarch の人々が評する以上の、Casaubon の非人間性の発見の過程でもあった。しかし前に進むことしか知らない18歳という若さゆえに Dorothea はそれが幻想であることなどつゆほどもわからないどころか、幻想はさらに大きな幻想をよび、Casaubon が彼女を妻として認めてくれた時のことを思うとまるで生きながらにして天国に導かれるような高尚な幸せでいっぱいになるのであった。彼女は彼との結婚生活を次のように想像する。

‘It would be my duty to study that I might help him the better in his great works. There would be nothing trivial about our lives. Everyday-thihgs with us would mean the greatest things. It would be like marrying Pascal. I should learn to see the truth by the same light as great men have seen it by. And then I should know what to do, when I got older : I should see how it was possible to lead a grand life here-now-in England. . . .’
(chap. 3)

(「私が彼の偉大な研究をよりよく助けられるようにとにかく学ぶことが私の義務になるのだわ。私たちの生活にはくだらないことなど何もうなくなるでしょう。私たちの身の周りにあるものは何でもみな最大限の意味を持つようになるのですもの。Pascal と結婚するようなものだわ。私はこれ

までの偉人たちと同じ光で真実を見るのを学ぶでしょうし、そうしたら、私は年をとったとき、自分のすべきことが一体何であるかがわかるでしょう。つまり私は現在の、この、このイギリスでどうすればすばらしく立派な人生を送ることができるかを知ることでしょう。……」)

(3)

Casaubon が寄る年波と文字の読み過ぎで目を傷めているのを知るにつけても彼との結婚がますます望ましいものに思われてくる Dorothea は30歳ほども年の差などものともせず Casaubon からのプロポーズを待ち焦がれるようになるが、一方 Casaubon の方もまた Dorothea の自分に対する敬愛の気持を知って次のような感慨を抱く。

... it was now time for him to adorn his life with the graces of female companionship, to irradiate the gloom which fatigue was apt to hang over the intervals of studious labour with the play of female fancy, and to secure in this, his culminating age, the solace of female tendance for his declining years.

(chap. 7)

(今や女性の伴侶の優雅さで自分の人生を飾り、勉強辛苦のあいまいに疲れによってもたらされがちな物憂さを女性らしい空想という慰めで晴らし、現在のこの人生の盛りの時に来るべき老くの年月を介護してくれる女性がいるという安寧を確保する時期がきたのだ。)

つまり Casaubon が Dorothea に抱く妻の実像は人生の装飾品であり、日常の憂さ晴らしであり、はたまた老いた身の介護者なのであった。wise になることと人生の grandest path を見つけることに夢をかけ偉人の妻になることによってその夢を実現することに情熱を燃やしている、強い Puritanism を身につけた18歳の少女 Dorothea が自ら描く妻の像と Casaubon の心の中に描かれた Dorothea に托する妻の像とはあまりにかけはなれていたのである。30歳ほども年上の夫として常識的な光の中で Dorothea の心を少しでものぞいてみようとする積極性が Casaubon にあれば Dorothea に自分の妻としてのその理想像を当てはめることがとうてい無理であることは一目瞭然といえるほど明白なことであるのに、Sir James Chettam がいうように、若さゆえにそれを認識できない Dorothea のそれにもまして、Casaubon の自分自身の学問以外の外界に対しては全く視界が閉ざされた、社会的にはどうしようもないほど未成熟な人間性に彼らの結婚生活の悲劇性を見るのである。これは言い換えれば Dorothea が幻想の中に Casaubon を閉じこめてしまって彼の本来の姿を見失っていたのと同様に、Casaubon もまた Dorothea の像を彼の egoism の中で勝手に作りあげてしまっている結果なのであり Dorothea が、偉人であるという条件さえ満たせば結婚の相手として Casaubon でなければならないという必然性がなかったのと同様に、Casaubon もまた、たまたま Dorothea が彼を敬愛したという事実があったからこそ彼女を伴侶にしようとしたまでのことで Dorothea を是が非でも自分の妻にと望んだ訳ではなかったのである。

とにかく Casaubon の、50歳にもなろうとするその年齢と Sir James が言うように長い間の学究生活によって枯渇してしまった彼の人間性から生ずる Dorothea への思いは、まだ花もつぼみのような Dorothea の Casaubon との結婚への燃えるような理想に裏付けられた

情熱に比べたらはなはだしく貧弱である。彼は美しい娘 Dorothea の花婿となる自分の、「感情の流れのままに身をまかせることを決意したが、その感情の流れなるものがしごく浅い細流であることがわかり驚く。……それで Mr. Casaubon はとびこみたくてもとうてい不可能なその流れの水をただ体にふりかけるのが精いっぱいだったのである」。(chap. 7) しかし彼はそのように自分が結婚を決意するほどの女性に対してそれなりの激しい感情をかきたてられないのは自分の心の中に人間としての正常な、人を深く愛する心が育っていないからであるということには気付いてはいない。それで「彼は過去の詩人たちは結局、男性の情熱の激しさを誇張しすぎたのだと思った。それにもかかわらず彼は Miss Brooke がみせる燃えるような自己犠牲的愛情が、彼が最も楽しく描き出す結婚の予測を必ず満たしてくれるであろうことをみてとって、とてもうれしかったのである。激しい情熱に身を任せられないのはひょっとして Dorothea に何か欠陥があるのかもしれないという思いが一・二度彼の心をよぎったことがあった。しかし、その欠陥が何であるか定かではなかったし、彼女以上に彼を喜ばせる女性の姿を我身に思い描くことはできなかった。それで人間は伝統的にそういうことに大げさすぎるのだということ以外には頼るべきどんな根拠もなかったのである。」(chap. 7)

すなわち “…… The great charm of your sex (woman) is its capability of an ardent self-sacrificing affection, ……” という Casaubon 自らの言葉からもわかるように、彼は自分が女性の最大の魅力だと思っていた「情熱に燃える自己犠牲的愛情」を50年近くにもわたる人生において初めて18歳の Dorothea の中に見い出し、その上、Dorothea の聡明さが自分の学究的人生には有用であろうし、Dorothea のその情熱的愛情と彼の娘ほどのその若さがあればこそ、老いを感じ始めた一人身の自分の妻として Dorothea を得るのが好都合だと思ったのである。

Casaubon はここでもまた一つの誤りを犯していることに気がついてはいない。若く聡明であることに加えてこの上なく美しい Dorothea が、Sir James の言葉を借りれば「棺おけに片足をつっこんでいる」50歳もの、虚弱な、Selia がいうような “ugly” man である Casaubon にどうして無条件にそのような an ardent self-sacrificing affection を与えるであろうか。彼は自分がこれまでの長い人生を徹頭徹尾打ちこんできた *Key to all Mythologies* が無意味なものであるかもしれないという恐怖はひそかに抱いていたものの、自分の人生や学問を顧みるゆとりすらなく逆にそういうゆとりを持つことを罪惡視するような彼の生活は、Dorothea のその an ardent self-sacrificing affection にはその根底に人生の grand path に彼女を導き全き善に向かって共に歩いてくれる人としての Casaubon に対する期待があることも、そのような理想的な人生を生きることへの若くたぎる情熱があることもほんの少しでも感じとる繊細さ、というより情緒を彼から奪ってしまっていたのである。

(4)

Dorothea と Casaubon との婚約・結婚は、まず、Dorothea には一番身近な妹の Celia に、Dodo 姉さんが Mr. Casaubon の求婚を受け入れるのではないかと予想しただけで a

sort of shame mingled with a sense of the ludicrous (こっけいな思いが入り混じった恥ずかしさ)を感じさせ、いざその結婚が現実のものになるや「かつてないほど顔色を失わせ」涙すら流させたばかりか ‘I am so sorry for Dorothea.’ とまで言わせ、Mrs. Cadwallader をも ‘… this marriage to Casaubon is as good as going nunnery.’ とあきれさせ、また他の Middlemarch の人たちをアッと驚かせるほど突飛なものではあったが、当の Dorothea はこれまで見てきたとおりその結婚に果てしない夢と理想を描きながら、そして Mr. Casaubon は老いを感じ始めた一人身の自分の今後に不安を感じ始めてはいたものの、張りつめた中にも坦々としていた自分の生活にまさに降ってわいたような Dorothea とのその結婚を半ば喜び半ば邪魔ものを片づけるような気持で婚約し結婚する。

Tipton 教区の Rector. Mr. Cadwallader によって、先にも述べたように、rector の仕事のかたわら魚つりにかけては目のない自分と同じレベルの学者牧師であると評された Mr. Casaubon を偶像視し、彼と共に暮らすことの中に果てしない幻想を抱いた Dorothea であったから、それがいつ実際の幻となり失望に変わるかはまさに時間の問題であった。そして彼女の結婚に対する最初の失望は、直接 Casaubon 自身へのものではなかったが婚約が決まったあと Casaubon が manor を持つ Lowick の彼の邸を訪問した時に早くも訪れる。

それはこの論文の 2 の部分で述べた、Dorothea が彼女の人生において善としている二つの理想のうちの一つである、tenant たちの生活の改善というテーマについて、現在の Tipton 教区ではその広大な土地を有するおじの Brooke 氏が tenants の住居の管理という責任をほとんど放棄してしまっているため、人権が無視されているような住環境を強いられた農民たちの悲惨な生活の実態は、Dorothea の善をなそうとするその内なる理想を大いに鼓舞するものがあつたのであったが、Lowick の Casaubon が有する manor を見た限り農民たちは Tipton の tenants より食生活にしても住居にしてもはるかに良好な状態で、Dorothea がその理想を実現できそうな場がほとんど見当たらなかったからである。それは客観的事実として致しかたないとしてもその時の彼らの次のようにちぐはぐな会話は、その後の彼らの不幸な結婚生活を示唆しているように思われ気がかりである。

‘I am feeling something which is perhaps foolish and wrong,’ answered Dorothea, with her usual openness— ‘almost wishing that the people wanted more to be done for them here. I have known so few ways of making my life good for anything. Of course, my notions of usefulness must be narrow. I must learn new ways of helping people.’

‘Doubtless,’ said Mr Casaubon. ‘Each position has its corresponding duties. Yours, I trust, as the mistress of Lowick, will not leave any yearning unfulfilled.’

(chap. 7)

(「私はひょっとして愚かな間違っただけを考えているのかもしれませんが」と Dorothea は、いつもどおりの率直さで答えた。「ここの人たちがしてほしいと望んでいることがもっともっとたくさんあればよいのにと思っているのですわ。私の人生を何かいいことに役立てようというその道が、ここにはほとんどないことがわかったのです。もちろん役にたつという私の考えは狭い意味のものでなければなりませんけれども。私は新しく人々をお助けする方法を学ばなければなりません。」

「確かに」と Casaubon 氏は言った。「人にはそれぞれその立場にみあった義務というものがあります。あなたが Lowick 邸の女主人になればどんな願望も決してかなえられないことはない」と私

は確信しておりますよ。)」

つまり Dorothea にとっては tenants がその援助の手を待っていないならば邸の mistress になるというそのような客観的な条件は何の意味も価値もないことであったのに、Casaubon は Dorothea が彼と結婚し Lowick 邸の mistress になることに彼女自身の満足と幸せの一切が保証されるのだ、言いかえれば自分が彼女を妻として Lowick 邸に迎えることによって彼女の物心両面の幸せを保証してやるのだというはかり知れない自負の中でしか彼女の事を考えることはできないのである。そのような彼が、それ以後続々と感じやすい Dorothea の心を襲う落胆、失望、悲しみの実態を理解し、傷ついた彼女の心をいやすべく夫としてのやさしい援助の手をさしのべることなどとうてい不可能なことであった。実際彼は「他の人々は、神のおぼしめしによって彼のために作られたものであって、彼らのことを、まだ未完ではあるが彼のライフ・ワークである *Key to all Mythologies* の著者にふさわしいかどうかという光の中で考える」ようなどうしようもないほどのプライドを持った男だったのである。

そしてそのような Casaubon 自身に対する Dorothea の最初の失望は結婚の日を間近に控えたある朝突然訪れることになった。Casaubon は Dorothea と Roma への新婚旅行について「Dorothea さん、あなたは一日のとても長い時間をひとりぼっちで過ごすことになりそうですよ。私は Roma に滞在中は是非とも私の時間を最大限有効に使いたいと思うのです。もしあなたのお相手が誰かいたら私はなお心おきなく感じられるでしょうね (I should feel more at liberty if you had a companion.)。」「と言ったのである。婚約していや増した Casaubon と共に暮らすことへの熱情から Casaubon の言動に対しては特に過敏になっていた Dorothea は、たとえ新婚旅行といえども、そして旅行先が Roma であったということも作用していたといえども、その目的を自分の研究活動に中心を置き、それはそれでいいとしても夫の研究内容をできる限り知りその壮大な著書の手伝いをしたいと希求している彼女の心の内など知るよしもなく他ならぬ妻である Dorothea の存在が何となく足手まといであるような Casaubon のそのような物言いの中の、特に 'I should feel more at liberty' という言葉に、激しく反発したのである。

そのように Dorothea をひどく傷つけた言葉は Casaubon の次のような心理状態から発せられたものであった。

……, as the day fixed for his marriage came nearer, Mr. Casaubon did not find his spirits rising ; nor did the contemplation of that matrimonial garden-scene, where, as all experience showed, the path was to be bordered with flowers, prove persistently more enchanting to him than the accustomed vaults where he walked taper in hand. He did not confess to himself, still less could he have breathed to another, his surprise that though he had won a lovely and noble-hearted girl he had not won delight, —

(chap. 10)

(結婚の日が決まりその日がどんどん迫ってきても、Casaubon 氏は意気軒昂といった気分にはなれず、すでに結婚している人々が花嫁と共に歩けば庭園の小径の両側はきつと花々で飾られるようになるのだといっている、そういう光景を自分の心に思い描いてみてもそれはすぐにかき消され、彼が手にろうそくを持っていつも見回るうす暗い部屋の方が、彼にとってはより魅力的なもの

となって心に映るのである。彼はみめうるわしく気高い心を持った乙女を獲得しはしたものの、それに伴うはずの喜びまでは獲得してはいないという驚きを自分自身にすら白状しないぐらいであったからましてや他人になどそぶりにもそれを見せようはずはなかった。）

それで Dorothea がサッと顔色を変え、自分に対してそのように懸念することがいかに当を得ていないものであるかということをはっきり口に出してすら当の Casaubon は Dorothea の心に横溢しているその annoyance には全く気付かない。Dorothea はしかたなく「私よりこんなに優れた人を夫に持つからには私が彼を必要とするほど彼は私を必要としないということを知っていなくちゃならないのだわ。」と自分の心に言いきかせやっとな得したのである。もともと Dorothea にとっては Casaubon との結婚は、彼が不朽の大作となるはずの *Key to all Mythologies* を近い将来完成し出版する偉人であるという彼女の勝手な思いこみだけに意義があったのであり、その思いこみが幻とならない限り感じ易い Dorothea の感情を Casaubon が多少害したとしても Dorothea の彼への思いがさめることはなかったであろう。しかし、Dorothea の心の中においては Casaubon の偉大たるゆえんのその *Key to all Mythologies* はどうやら実を結ぶ可能性がうすく、したがって Casaubon は陳腐な三文学者に過ぎないのではないかという疑いは、それからまもない、Roma での新婚旅行中に Dorothea を襲うことになる。

(5)

しかしその疑いが突如として Dorothea の心にわいたのではない。2の部分でも述べたとおり Dorothea は Casaubon とさえ結婚できれば 'There would be nothing tribial about our lives. Everyday-things with us would mean the greatest things. It would be like marrying Pascal.' と考えていたのであったが、いざその結婚が現実のものとなると、実際の生活は、彼女がそれ以前に嫌悪しそういうものから脱出する手段として偉大な人とのその結婚があったはずなのに、やはりなお endless minutiae (最限もなく続くささいな事柄) で成り立っていて、「その観点からみた、Dorothea の、Casaubon と彼の妻としての彼女との関係についての考え方も…時計の針のひそやかな動きと共に娘時代の夢の中にあったものから次第に変化しつつあった」のである。とにかく人の妻になるという untried duty を enthusiastic (chap. 20) に受容した Dorothea であり、もともと quick emotions で「どんなに抽象的なことであったもそれに実際上の喜びとか苦痛とかの性質を帯びさせてしまう」Dorothea であったから、自分が想像していた状態とうってかわっているこの新しい現実への落胆はそれだけにより激しいものであったに違いない。とにかく Dorothea には Casaubon が「日常的な事柄にも最大限の意味付けをしてくれる Pascal」には決してなれないことがわかったどころか、結婚前は「夫の精神に壮大な展望とそこに息づく新鮮な息吹を夢ごちで見出していたのに、それは控えの間であったりどこにも行きつくことのなさそうな曲がりくねった通路であることを、はっきりと見た訳ではなかったが、しかしそれを何となく感じとって息がつまるほどがっかりしていた」のであった。実際 Casaubon については「人類の一般的生活がかつて彼の中にか (chap. 20)

きたてた思考する力や情緒的能力はずっと前に萎びてしまい、ひからびた標本のようなもの、命のない知識の防腐処理剤とでもいったものになっていた」のである。作者の George Eliot も、「あふれるほどの知識を獲得することに費やされた長い年月が、結局彼の心に興味も共感も全く欠如させてしまったそういう人との交わりほど、熱情にかられやすい性格の若い人を意気阻喪させるものはないであろう」と初めて作者自身の言葉で Casaubon の人間的な面の味気なさを批判している。^(Ibid.)

しかしそのように結婚後ほんの数週間の中に打ち寄せる波のように Dorothea を襲った depression が、Casaubon 自身が以前と変わったためにもたらされたものではないということはこれもまた明らかなことである。George Eliot も明言しているとおり、「Mr. Casaubon ほど見かけだおしになるほど外見を取りつくろうことのできない男はなく、彼は反芻動物のように純粋な性格をしており、自分自身について、それがどんなものであれ、何らかの幻想を抱かせるような積極的な働きかけはしたことがなかった」のである。^(Ibid.) Casaubon どころか、Casaubon と Dorothea が結婚したという事実を除いた他のすべてが、何ら変わることもとのままであったのにもかかわらず、Dorothea が real future に少なからず失望していたとすれば、それは Dorothea の心の中に輝いていた光が、ただそれだけが変わったことに起因するものであったと見なされなければならない。「真珠のような色をしたおぼろな曙は日ざかりには見えないものである。求婚時代とよばれる想像力にあふれた数週間のほんの短い間に、その性格を熟知したと思われた相手でも、伴侶となって常にそばにいて眺めれば、予想をはるかに上まわる場合も、またはるかに下回る場合もあるのであって、全く予想と変わらないなどということはまさにありえない不変の事実なのである。」^(Ibid.)

「Cabeiri のことがよく理解できずにいらしたり、他の神学者の間違った見解を暴いたりしているうちにかつて彼をそのような困難な研究にふるいたさせたその本来の目的を知らず知らずのうちに見失ってしまった」Casaubon の現実の姿を知った Dorothea は以前のような喜ばしい確信をもって「彼に従ってさえいけばやがて広々とした世界が必ず見えてくるはずだ」と期待するのを次第にやめるようになっていたのである。すなわち熱情にかられやすく果てしなく高い理想を追い求め自分の中に確固とした思想を形成することに強い願望を抱いていて、若者にありがちなそういった理性的側面が異常に勝っている反面、Sir James Chettam が言うように世間的には ‘She is too young to know what she likes.’ とみなされざるをえないほど未成熟である Dorothea であるからこそ、ほんの二・三回の邂逅で客観的根拠は全くないままにたちまちのうちに Casaubon を Pascal や Bossuet に匹敵するほどの偉人に偶像化して心のうちを夢と希望と理想で満たし、その激しさに比例するほどの落差をもって、結婚といういざ現実的局面に立ち入ってその偶像がこわれはじめるやいなやたちまちのうちに彼と共に歩む現実的な将来を暗澹たる思いで眺め始めたのであった。

注 本文中の *Middlemarch* の引用は The Penguin English Library (Harmonsworth, Middlesex, England, reprinted 1978) を定本とした。

- (1) Saint Theresa : (T. de Jesus) 1515—1582スペインのキリスト教神秘主義者。聖女。アラビア生まれ。カルメル会修道院を改革し、跣足カルメル会を興した。著「完徳の道」「自叙伝」
- (2) Hooker : Richard Hooker (1554?—1600) 英国の神学者 *Of the laws of Ecclesiastical Polity* (1594—7 : 全 8 Vols の内最後の 3 冊は死後の出版)
- (3) Milton : John Milton (1608—1674) イギリスの詩人。ピューリタン革命を支持する著作を著し内面的自由の主張と共和制擁護の論陣を張る。晩年、失明の逆境の中で宗教的主題による深遠な叙事詩を口述した。叙事詩「失樂園」「復樂園」、悲劇「闘士サムソン」など。
- (4) Locke : John Locke (1632—1704) イギリスの哲学者。政治思想家。経験論および啓蒙思想の創始者とされる。人間の知識は感覚、経験から成り立つとして、デカルトの生得観念説を批判した。また政治論では専制主義に反対して、三権分立、信教の自由などを主張、近代民主主義思想の源流となった。
- (5) Bossuet : Jacques Benigne Bossuet (1627—1704) フランスの神学者。ルイ14世の皇太子の教育係を務め王権神授説を展開。雄弁で知られ教皇庁に対しフランス-カトリックの自由を主張した。
- (6) *Pensées* : [思考] の意。パスカルの遺稿集。神なき人間の悲惨を説き、信仰の偉大な力をたたえる。「キリスト教弁証論」として執筆されたが、明晰で力強い文体、鋭い人間観察によってモラリスト文学の傑作に数えられる。瞑想録。
- (7) Pascal : Blaise Pascal (1623—62) フランスの思想家、数学者、物理学者。合理的、抽象的な幾何学の精神と、心情や直感による繊細の精神を区別するとともに、人間性における悲惨と偉大の両極を指摘し、この矛盾を直視し救うものがキリスト教であるとした。数学、物理学においては射影幾何学の先駆的業績や、流体の圧力に関する原理の発見のほか、真空の存在を立証する実験、計算器の考案、求長、求積法、数学的帰納法の自覚的使用、確率論の端緒となったフェルマーとの文通などで知られる。著「パンセ」、「プロバンシアル」など。
- (8) Augustine : Aurelius Augustinus (354—430) 古代キリスト教最大の教父、思想家。青年期マニ教・新プラトン主義などを遍歴、のちキリスト教に回心。故郷北アフリカの Hippo の司教となり、異端との論争を通じてキリスト教の神学的基礎を開く。パウロを高揚し原罪を負う人間は神の恵みによってのみ救われるという恩恵論を提示。*City of god* (『神の都』), *Confessions* (『告白録』) など。
- (9) Cabeiri : A group of Samosracian fertility gods. カペイロス神。やがてギリシャ全土に広がった。